

放送のオーラル・ヒストリー

「テレビ美術」の成立と変容

(1) 文字のデザイン

メディア研究部 廣谷鏡子

シリーズ「放送のオーラル・ヒストリー」では、3回にわたって「テレビ美術の成立と変容」をテーマに取り上げる。本稿はその1回目で、「文字のデザイン」に焦点を当てる。1953年2月1日、NHKがテレビ放送を開始し、全国で次々とテレビ局が開局するが、当時、番組タイトルや放送中に表示される文字＝テロップは、すべて手書きであった。やがて、手書きにかかる人件費、誤字の防止といった理由から、テロップを写植機で作成するようになる。「テレビ明朝」などテレビに合った書体を生み、手書きと併用されながら20年以上にわたって写植で文字を作る時代は続く。しかし、放送制作のシステムそのものがデジタル化されると、文字を発生させる装置としての写植機は、コンピューターにその役割を譲っていく。手書き時代のデザイナー、写植機導入時のオペレーター、その他関係者の証言から、テレビの文字制作が手書きから、写植機、コンピューターへと移り変わる歴史を辿り、テレビ文化において「文字」が果たした役割を探る。

1. はじめに

1953年にテレビ放送がスタートして60年が経った。テレビの誕生は、それまでのラジオ放送にはなかったさまざまな職種を生んだが、そのひとつが「テレビ美術」である。テレビの草創期については、「生ドラマ」時代の現場をテーマにさまざまな視点からオーラル・ヒストリーにより探ってきたが¹⁾、今回は「テレビ美術」に焦点を絞って、3回シリーズで、さらに詳細に見ていくこととする。

第1回の「文字のデザイン」に続き、第2回は、「スタジオセット」のデザインの成り立ちを美術デザイナーの証言をもとに読み解く。また第3回は、大道具、小道具、メイクアップ、衣装といった「スタジオ周辺業務」の実態を、関係者の証言から掘り起こす予定である。

さて、ラジオと同様、テレビは情報を伝達するメディアであるが、“聴く”だけのラジオと違い、テレビは目と耳に同時に訴え、「情報」をより具体的に伝えることができる。そのため、「視覚化」して伝達することがテレビの使命となった。番組を視覚化するにあたって、まず必要となったのは、ラジオ時代にはなかった「番組タイトル」であった。それまで“聴く”だけだった番組に、「表紙」をつけなくてはならなくなったのである。さらに、タイトルにはその背景があり、番組中の画面にも、情報を視覚化するためのビジュアルデザイン＝「テレビグラフィック」が必要となった。現在はデジタル化されているこれらのものは、テレビ草創期にはどのように制作されていたのだろう。

本稿では、テレビグラフィックのうち、特に「文字のデザイン」に焦点をあて、テレビ草創

期の手書きタイトル現場の仕事の実態と、それがテレビの発展にともなってどのように移り変わってきたのかを、関係者の証言をもとにまとめる。

2. 定義と研究素材

テレビのビジュアルデザインの総称である「テレビグラフィック」は、以下のもので構成されている（日本放送協会編『NHKテレビ美術読本』より）。

- ①番組メインタイトル
- ②メインタイトルのバック（背景）
- ③番組中に登場する文字（テロップ）・イラスト・図表・シンボルマークなど
- ④スタジオセットに描く大地図やイラスト
- ⑤小道具として使用するメニュー類
- ⑥アニメーションのキャラクター原画など
- ⑦コンピューター・グラフィックス

これらのテレビグラフィックのうち、本稿で取り上げるのは「文字のデザイン」であるが、ここでは、名称を以下の用語に統一して使用することとする。

- 番組のメインタイトル＝「番組タイトル」
- 放送中に表示される文字＝「テロップ、スーパー」
- 番組タイトルや文字制作の業務＝「タイトルデザイン」
- 番組タイトル・文字制作の担当者＝「タイトルデザイナー」
- タイトルを手書きで制作するデザイナー＝「手書きデザイナー」

また、本稿では以下の方々の証言を研究素材として使用する（掲載順、*は、本誌2010年12月号「放送史への証言 “制約” のなかの

自由」で使用）。

- ・篠原榮太さん…TBS 開局時のタイトルデザイナー。（2010年8月23日収録）*
- ・加藤整さん…TBS からNHK 大阪局。時代考証も行うタイトルデザイナー。（2012年11月11日、2013年1月13日収録）
- ・竹内志朗さん…大阪テレビ放送ほかでタイトルデザインを担当。（2013年1月12日収録）
- ・渡辺裕英さん…NHK で手書きデザイナー。故人。（2010年3月19日収録）*
- ・堀正芳さん…NHK で手書きデザイナー。イラスト、法廷画なども担当。（2010年3月19日収録）*
- ・井関博美さん…写植機のメーカー「写研」からNHK。NHK 専用機開発に従事。（2010年4月13日収録）
- ・橋本彰夫さん…写研からNHK 美術センター（現・NHK アート）。写植機オペレーター。（2013年10月31日収録）
- ・小野耕平さん…NHK 美術センター（現・NHK アート）入社時よりテロップ制作等に従事。（2013年10月24日、11月7日収録）
- ・秋山匡司さん…NHK 美術センター（現・NHK アート）で写植機オペレーター。（2013年10月31日収録）

3. 「手書きさん」の現場

1953年2月1日、NHKがテレビ放送を開始し、その後、全国で次々とテレビ局が開局する。ここでは、開局の頃を中心に、東京や大阪の放送局で「タイトルデザイン」という初めての仕事に従事した人たちの証言から、放送における文字の歴史の始まりを振り返っていこう。

55年開局のTBS(当時はラジオ東京テレビ)では、当時、美術課タイトル係が、「7名ですべての番組のいっさいのタイトルと、番組CM、スポット、CMカード、IDカードなどの商業タイトル制作を担当していた」(『東京放送のあゆみ』より)。その中の一人が篠原榮太さんである。

テレビは新しいメディアで、当初は1日4、5時間しか放送がなく、タイトルのことなんて誰もわからなかった時代である。



篠原榮太さん

1927年、東京生まれ。TBS開局当初から番組タイトルデザインに携わる。タイポグラフィー(活字を主体とした構成デザイン)の第一人者として、書体のデザインも手掛ける。

篠原:タイトルは紙に手書きしていましたが、その紙が白だとハレーションを起こして使えないので、白い紙をグレーに塗って使うんです。フリップ²⁾はデザインしやすかったけれど、ある日突然テロップサイズになって、小さいので書きづらく、それがいやで辞めた人もいます。それに小さい文字は走査線の間に沈んでしまうので、文字の大きさにも制限がありました。……毎日泊まり当番がいて、時間に追われながら書いていましたね。

筆文字による番組タイトルも書いた。

篠原:最初は、外部の書家に頼んでいたんですが、急ぎでやることが増え、内部のスタッフ

でこなさなければ間に合わなくなってきて、書くようになったのです。もうそれは書きまくりました。書道を習ったこともあるけど、いつも先生に反逆してたから、あまり好きじゃなかったね。

篠原さんは数をこなしながら、篠原さんにはかない個性を發揮していった。

大学在学中からTBSでアルバイトをしていた加藤整さんは、篠原さんの後輩にあたるが、篠原さんの仕事を傍らでつぶさに見てずいぶん技術を盗んだ、と笑う。

加藤:テロップを書くとき、個人個人でほとんど書体が違っていました。自分なりに書いてしまうんです。書体がテレビに映る時、筆順と言うのがありますね。たとえば、「警」の字は横線が多いでしょう。最初は横ばかり書くんです。それであと、つないでいく。そういう書体の書き方が身につけてしまっているの、書き順はほとんどその人なりにしかできない。篠原さんがテレビ向けに自分流に書体をつくっていった。それを僕はそばで見ていて、全部真似して取ってしまった(笑)。



加藤 整^{ひとし}さん

1937年、東京生まれ。大学在学中の1956年からTBSで、タイトルや小道具のデザインを担当。約10年の勤務の後、NHK大阪放送局へ。時代考証と書画をこなす稀有なデザイナー。現在放送中の連続テレビ小説『ごちそうさん』でも、加藤さんの書画が楽しめる。

篠原さんがテレビ向けに開発した勘亭流の文字も、加藤さんは横で見ていた。

加藤:だから一番篠原さんに感謝しているのは、徹夜を何回かして、覚えて覚えて覚え抜いたという感覚です。

その後、加藤さんはNHK大阪放送局に移ることになるが、西日本で最初に開局した民放テレビ局で、当時から文字を書いている人がいる。竹内志朗さんだ。ここからは主に竹内さんの証言を見ていこう。舞台美術家をめざしていた竹内さんだが、手に職をつけようと図案屋へ弟子入りをしたことが、今につながっているという。

56年、開局当時の大阪テレビ放送(59年、毎日放送と分離。現・朝日放送)の美術部には、7人がタイトル書き担当として契約した。彼らは「手書きさん」と呼ばれていた。舞台美術を目指していた竹内さんにとって、テレビは魅力的な世界だったのだろうか。

竹内:魅力というよりも、とにかく食べていけるということでしたから。僕は字をやって来たから字を書きたい、が一番先に来たんです。初めてやるから何でもが興味津々なんです。やじ馬の興味で仕事ができるという。スーパーの文字は黒の台紙に書きます。白で書いたらハレーション起こすからちょっとブルー混ぜたらどうなるん、とかね。あ、これ、落ち着くわ、とか、スーパーはちょっと青いほうがええ、とかね。そういうのが毎日でしたから。

手書きテロップは、1枚いくらという出来高払いだった。



竹内志朗 さん

1933年、大阪生まれ。中学生で新劇『ロミオとジュリエット』を見て、「舞台装置」をやろう、と決意。劇団に在籍しながら、デザイン工房に弟子入りし、あらゆる活字の修業をしたのち、大阪テレビ放送と契約、タイトル文字を書くようになる。現在は舞台美術家としても活躍中。

竹内:そのとき、最初にもろたんが、2万5,000円やったんです。1か月書いた分のトータルなんです。バック(背景)入ったんと、バック入ってないのと分けられたと思うんですけどね。当時、社員の月給が8,000円ぐらいやったと思います。お前は何でこんなに稼ぐねんって、そのときから言われた(笑)。

数なんです。7人言うてもね、若いもん、僕ともう1人だけでした。あとはみんな、50を過ぎてましたんで、そないに昼夜兼行で仕事できないと。

全放送を、そのときはちょっとしかなかったんですけど、ニュースから全部やっていましたからね。開局ですからしっちゃかめっちゃかなんですよ。誰が何を書いたかって、覚えてないです。(開局が)12月1日ですが、美術の部屋だけが暖房が入らない(笑)。倉庫だったやつを、美術の部屋ないなということで。でも今から思うと、楽しかったですね。今みたいにきれいな画面と違いますからね。だから大まかに書かないかん。5ミリ角以下の小さい字を書いたらあかんとかね。今思うと、あいつに書かしたら早いで、すぐ書きよるで、ということだったようですね。



竹内さんの手書きによる初期の頃のニューステロップ
(大阪テレビ放送)

時間に追われるニュースのテロップ(60秒くらいで書かねばならなかった)も、もちろん手書きである。

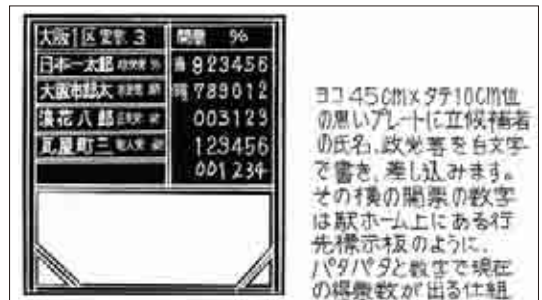
竹内: (ニュース用の字体は), その頃, TBS系の全国ネットでは斜体の明朝で, と決まっていました。だからいかに一筆で明朝を書けるかを研究せないかんわけですよ。ピッピッピッピッピッと書けるように。一筆で山をピュッと作ったりね。

選挙速報も, このくらいの大きさ(横45センチ×縦10センチくらい)のプレートに立候補者の名前と政党を全部書きます。1枚ずつ入れてバタバタバタバッと票数出して(右図)。このときはものすごい徹夜しましたからね。公示日に候補者が新聞に載るのを待って, 選挙期間中にこれに名前書くわけですよ。全国区ですからね。全部の速報をせないかん。とにかく, ニュースは「考えずに早く書く。間違いなく早く書く」でした。

ワイドショーのはしりで『ワイドショー・プラスα』(朝日放送 72~82年)というのがあって, 大道具のセットの予算がないんです。だから「竹さん, 書いてや」と言われて, 5メートル×2メートルのパネルに, 毎日, その日のテーマを

大きく書くんです, 安い値で(笑)。

とりあえず間に合わさないかんということで, ずっと僕は仕事やってきたと思うんです。だから中には間違いもずいぶんありました。とんでもないこと書くときもあるんです。いっぺん, プロ野球のニュース書いたときに, 全然違うこと書いて平気で出てしまいました。「違うやんか!」「ああ, ほんまやなあ」言うて(笑)。それ, 出るんですからね, 怖いです。



(図) 選挙速報
(竹内志朗『テレビと芝居の手書き文字』より)

開局して3年ほどは生放送が続き, やがてVTRが登場する。

竹内: VTRになったからといって, 私にとっては変化はないです。だんだんときつうなつたというだけの感覚ですね。よけい忙しなつてきたなど。生放送ならそれで終わりなんです。VTRは撮りだめですから。今欲しいとか, すぐやれとかになってきたんです。編集時間を押さえてるから, 何台もありますからね, 機械が。「ほかの人に頼めよ」言うても, 「あかんねん」言うて(笑)。

一方, 東京のNHKにも, 手書きテロップの時代を知る人がいた。

渡辺裕英さんは60年から美術部のタイトル執筆契約者となった。



ゆうえい
渡辺裕英さん

1928年、新潟生まれ。NHKアートで長年タイトル制作に携わる。特に「筆書き」の第一人者として、ドラマを中心にさまざまな番組タイトルを手がけてきたが、2013年1月、逝去。



堀 正芳さん

1937年、岐阜生まれ。61年、NHK美術センター（現・NHKアート）設立の年に入社、その後フリーに。NHK番組の手書きタイトルのみならず、イラストから似顔絵、法廷画まで幅広くこなしてきた。

渡辺：6ミリくらいのテロップの文字を書くのが仕事でした。単価契約で、テロップ1枚書いて、1B50円とか、60円とか、1Bというのが1単位だったと思います。毎日、テロップを書き続けて、ひと月で、だいたい1万5,000円くらいになりました。

朝のニュース番組を受け持つと、5時から仕事場へ詰めます。2人組の当番制で、2行か3行くらいの下ダブリ（画面の下部にオーバーラップさせるスーパー）を書くんです。丸ゴシといって筆の先のちょっと丸い筆を使ってポスターカラーで書きます。ニュースだけでなく一般番組でも使うので、下ダブリは1日に10枚や20枚は書いていましたね。

堀正芳さんも、渡辺さんの翌年から、NHKで手書きデザイナーとしての一步を踏み出した。

堀：テロップカードに、僕は文字をポスターカラーで、溝引き（定規）も使わないでフリーハンドで書いているのです。丸はコンパスで。当時、ニュースもこうやって丸ゴシックで手書きでした。ニューススタジオに行っては原稿をもらって、テロップカードにフリーハンドで書くんですが、

これが一番時間がかかるんです。ニュースの下には必ずNHKのロゴが出ますね。これは毎回必要ですから、ロゴだけを書いたテロップをあらかじめ作っておいて、その上部にその都度、手書きで書き入れるという仕組みだったのです。透明のシートに決まりのロゴを印刷しておいて、それに上から圧力をかけると刷り込まれるという「刷り込み」という方式もありました。このテロップ（写真）でいうと、「NHK教育TV」は毎回使いますから、刷り込みですね。「学校放送」「理科教室 小学校5年生」「終」はぜんぶ手書きですね。この頃はモノクロばかりでした。昭和39年の東京オリンピックあたりから、カラー化の比率が上がったように思います。



（写真）手書きのテロップカード（1961～63年頃）

竹内志朗さんの 筆書きタイトルの世界

竹内さんも他のタイトルデザイナー同様、筆書きタイトルの制作者として活躍してきた（渡辺裕英さん、堀正芳さん、篠原榮太さんの仕事については、本誌2010年12月号「放送史への証言“制約”のなかの自由」を参照）。竹内さんに書いてもらいたいと、ディレクターが順番を並んで待っているほどだったという。文字だけでなくタイトルバック映像の制作まで手がけた。代表的なものをご紹介します。

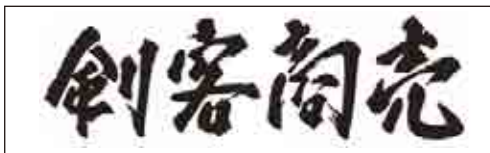
『必殺シリーズ』サブタイトル (朝日放送 1972～92年)



「全シリーズ、書家の糸見深南さんの題字をいわば「脚色」し、サブタイトルはすべて書きました。タイトルバック、全部考えますからね。いま、CGでやっているような動きのあるような画面を作りました。タイトル文字は何十枚書いても、使うのは1枚ですからね。そのくらい書かんと自分で納得できないです。それも時間かけられないですからね」

『剣客商売』

(フジテレビ・松竹 1998～2010年 藤田まこと主演版)



「これだけは1週間かかりました。池波正太郎先生の原稿用紙に書かれている文字を活かしながらの文字作りを求められ、竹内志朗の字になるまで何百枚と書きました。1週間で1,000枚近く行ったんですかね(笑)。やってもやっても、納得できなかった。自分が納得せえへんかったら絶対に納めませんのでね。それでこの字ができたんです。

台本を読まんと書けないんです。だから台本、欲しいと言います。というのは、あるとき、今すぐ書いてくれ、明日欲しいとプロデューサーから来たんです。それで書いて送ったら、監督が電話して来て「竹さん、台本読んでないなあ」。「読んでませんよ」言うたら、「そやる、あんな字違うで」と言われて。「台本、ちょうだい」言うたら、早速送ってくれて、書いたら「これやねん」と言われた。だいたいわかりたいのはストーリーなんです。どういう主人公が何をどうやってるかということが欲しいんです。だから僕、主人公のイメージで書いてると思うんです」

『新婚さんいらっしゃい!』

(朝日放送 1971年～)



「40年過ぎても変わることなく放送されているタイトル文字です。20年くらい過ぎた頃にこのタイトルの書体を変えようかという意見が出ました。私は書体を変えるのであれば、私以外の人に書いてもらってほしい、20年も続いている番組の標札です、それを変えるのであれば、私にはできない、と断りました。……今も私の文字で続いているところを見ればタイトル変更の話は立ち消えになったのだと思います」

『靈感ヤマカン第六感』

(朝日放送 1974～84年)



「クイズ番組です。タイトル書きと毎週の全問題もフリップに書き、それを撮影し、スライドするまでが私の仕事でした」

『探偵!ナイトスクープ』

(朝日放送 1988年～)



「このトップタイトルは比較的すんなりと決定されました。実はそのとき、こんなに人気で長寿番組に育つとは思いませんでした」

(『テレビと芝居の手書き文字』より)

4. 写植機の登場

手書きテロップの時代はそれからも続くが、やがて、テロップを写植機で制作する時代がやってくる。

写植(写真植字)とは、活字を用いなくて写真的操作で文字を組む方法である。カメラとタイプライターをミックスした機械(写植機)で、裏面から文字をストロボで照射し、1字ずつカメラで写しとる。文字サイズは焦点距離の異なった交換レンズで撮影していく。特殊レンズによって長体、平体、斜体文字に変形させることもできる。印刷では古くから使用されていた。ここではNHKを例に、写植機が登場してからの歴史を見ていく。

NHKでは、写植機によるテロップの制作は1955年に始まっている。写植機のメーカー「写研」から、NHKにオペレーターとして派遣されて来た井関博美さんに、当時の状況を聞いた。

井関: 当時、僕はまったく記憶はないんだけど、大づかみに言って、(手書きデザイナーは)当時の局長よりも収入が多かったというくらいだったんですよ。これでは制作費がたまらない、なんとかならないかということで考えられたのが、写植機の導入です。これを考えたのは当時NHKの美術課長だった佐久間茂高さん(故人)で、外国映画のせりふが主でしたね。『ハイウェイ・パトロール』だとか、『口笛を吹く男』とかが人気番組だったんですけども、だいたい30分番組で300～500枚くらいカードとして必要だったんです。これを写研に頼んで、NHKに納めていた。

それまでは手書きだったのだけれども、なんせ量が多いから、とてもじゃないけれども間



ひろよし
井関博美 さん

1935年、東京生まれ。(株)写研から写植機のオペレーターとしてNHK美術部へ。テロップ作成用写植機の開発と全国配備に尽力した。

に合わないということ、300枚ということ、手書き屋さんに頼むと大変な金額になるということで、なんとかできないかという発想だったようです。それから、文字を書いていく場合に、思い違いというのは必ずあるわけです。点が1個多かったとか、線が1本多かった、少なかったとかいう、そういう意味での間違いというのがあるんです。それを防止しようということだったんです。

僕が昭和32年にNHKに嘱託で来たときは、「下ダブリ」のスーパーインポーズが主力だったんです。教養番組、スポーツの中継、料理番組のレシピ、出演者の名前だとかが多かった。おもに芸能番組のようなものについては手書きが多かった。教育番組とか教養番組の場合は、わりと安くあげるためにも、写植で白黒で作っていたんですね。

ところが写植機を導入しても、素人がすぐ使えるかという、なかなか使えなかった。実は文字の配列が問題だった。文字の配列というのは数千字あるわけですから、漢和辞典方式で配置してあるんですね。これを覚えなければいけないというようなことがあって、とても素人はだめなので、機械を使える人間もよこして

くれということで、私が来た。

井関さんのあとに、やはり写研からオペレーターとして来たのが橋本彰夫さんである。橋本さんは、写研時代にNHKの「番組のお知らせ」のテロップを作って、当時、内幸町にあったNHKに届けていた。東京オリンピックの前、NHK美術センターができる前というから60年(昭和35年)頃だという。

橋本:僕が来たときは、もう3人くらいオペレーターがいました。写植機も2台か3台ですね。でも手書きがほとんど主体でしたよね。仕事の量としては、1日50枚くらい作れば、もうなかったんじゃないかな。で、あとはみな手書きだったんじゃないですか。(写植は)時間かかりましたよ。朝原稿もらって、大体、翌日なんです。納めるのは。手書きの場合はもう、待ってるあいだにできちゃいましたからね。ポスターカラーと黒い紙。写植の場合はそうはいかないね。四つ切りサイズで4枚しか取れませんでしたからね。だから、単価だけでもね、1枚十何円とするんじゃないですか。暗室も要るわけですよ。だから、安いから導入しただけではな



橋本彰夫 さん

1939年、東京生まれ。写植機のオペレーターとして、(株)写研からNHK美術センター(現・NHKアート)へ。のちに、デザイン部でデスク業務に携わる。

いと思いますよ。

手書きでも、写植と同じような文字、書いてたんですよ。でも、小さい字は書けないじゃないですか、筆では。だったらちゃんとした活字体でやろう、てことになったんじゃないですかね。書体も、相当種類がありましたから。

写植は正確で美しい活字体を使用できるが、まだ経費もかかるし、なにしろ、時間がかかった。写植が登場しても、手書きとの併用時代はしばらく続くことになるが、文字の世界でずっと生きてきた、上方のデザイナーはたくましい。

竹内: 写植は古くからありましたけど、放送用には、光ってる印画紙しかなかったので使い物にならなかったんです。テロップ用のつや消しの印画紙が富士フィルムでできるようになって、そのときから、これは俺が写植せなあかんと思うて。僕、写植まで打ってましたからね(笑)。あれ、簡単でしたよ。旁(つくり)で覚えてしまえば、どこに何の字があるかわかる。面白かったですね。

僕は写植も手書きも全部一体で、ここは写植の文字で、こっちは手書きで書くという、そういうけじめがありましたね。まあ、配役なら役名が写植で、手書きで役者の名前を書くとか。

写植が主や言うても、手で書くほうが早いですから、速報とか全部手書きだったんです。写植は1枚ずつ切って貼って、薄い印画紙をはがして貼っていったりね、そういう作業からやっていましたんでね。写植、ここ1字直す言うたら、そこから後ろ、全部直さないかんわけです。打ち直さないかんわけ。

その時代、印刷用で細い明朝しかなかったんです。横、太いのが欲しいから、僕が原字書くから、それを写植原版にしてほしいとモリサワさん(写植機メーカー)に言うたら、えらい怒られた。そんな損なこと、私とこできまへんと言われて、1年後に写研が太い字、出したんですよ。これはショックでしたね。

竹内さんの頭の中にあっただのに、幻となった太い明朝が、いわゆる「テレビ明朝」と呼ばれるものではないだろうか。



一般的な明朝体(左)とテレビ明朝体(横太明朝)

井関: 細い明朝体などの場合、横線が細いんですよ。線が細いと、テレビの走査線は525本でしょう。そうすると出たときに、位置によっては横線が見えなくなってしまうんですよ。そのために太いゴシック体を使うこともあったんですけども、これはあまりにも堅いので、もうちょっとなんとかなりませんかというようなことだったので、写研に横線の太い明朝を作ってもらったんですよ。「横太明朝」というものですが、我々はテレビ明朝と呼んでいたんです。昭和34～5年頃だと思います。

全国に支局のあるNHKは、さらに、写植機を地方局にも配備することになる。しかし、前述したように、写植機の操作でいちばん難

しいのは、文字の配列を覚えることだった。漢和辞典方式では難しすぎるということで、誰でも拾えるように、NHK放送文化研究所の用字・用語班の協力を得て、『放送用語辞典』の常用漢字表を使うことになった。これなら担当ディレクターにも打ち込むことができる。「放送用語一覧表」をもとに、50音配列にした。

井関:これは結果から逆になかなかメリットだなと思ったのは、活字は数千字あって、その中には放送で使ってはいけない活字があるわけです。そうすると、文字を拾っていくうちに、原稿にそのない文字が出てきた場合には、これは誤りだと逆にわかるわけです。

使い方も簡易だった。写植機の文字盤は構造上「裏返し」だったのを、プリズムを入れることで「正字」で操作できるようになり、さらに、それまでの写植機は暗室での作業を必要としたが、「ポラロイドと青焼きが一緒になったような方式」(井関さん)で、暗室は不要となった。こうして、「SPICA-TELOP」(スピカテロップ)というテレビ用の専用写植機が誕生した。東京オリンピック(64年)に合わせて2台開発し、1台は放送センターのオリンピック本部へ、もう1台は試作品として、長野放送局に配備された。67年度、簡易写植機の全国配備が終了し、タイトルの文字統一がはかられた。

さて、この写植機と並行して、ニュースの制作現場では、別の機種が開発されていくのである。迅速さが必須のニュース現場では、より簡易に文字を作る機能が求められていたからだ。それを開発したのは、大阪の写植メーカー、モリサワ写真植字機製作所(現・モリサワ)だった。

写植は手書きに比べて、活字の文字が統一できる、誤字の心配がないという利点はあったものの、前述したとおり、工程は時間のかかるものであった。

橋本:フィルムに文字を打ち込んで、それをレイアウトして、プリンターで焼いて、現像して、定着して、水洗して、ドラム乾燥して、それを

写植機によるテロップ制作の工程

写植機は下部分に光源があり、その上に文字を収容した文字盤がある。その上にレンズ系が並び、そのすぐ上でシャッターが開閉する。さらに上部に暗箱があり、ドラム状のスパールにフィルム・印画紙をセットする。最上部か、上サイド部分に表示盤があり、印字された文字の位置を示す。

オペレーターは、原稿を読み、字句の正誤を確認し、タイトルか、インサート用か、画面の下部にオーバーラップする(下ダブリ)ものか判断して文字の大きさを決定する。文字の大きさを変えるレンズは7級から100級まで24種類がセットされており、適した級数をセレクトして使用する。文字の大きさには字数にも関係があり、全体のバランス(字配り)、レイアウトとも関連してくる。また書体によっても大きく左右されるので、デザイン感覚が要求される。

写植機で1枚のオベイクカード
(テロップカード、125ミリ×100ミリ)を作る場合

- 1 原稿チェック →
- 2 フィルム装填 →
- 3 電源スイッチ入 →
- 4 レンズの選択 →
- 5 印字 →
- 6 現像処理 →
- 7 水洗・乾燥 →
- 8 レイアウト →
- 9 プリント →
- 10 修正・校正

日本放送協会編『NHK テレビ美術読本』
写真植字機の項より抜粋(秋山匡司さん執筆)

裁断してって、工程がすごくあったんですよ。手書きの場合は、紙を用意して、白を溶いて書く、2工程ですよ。ところが、写植テロップの場合、もう、五つか六つやらないと、製品にならない。ニュースは全部手書きでしたから、一番最初にニュースを活字化したかったんじゃないですかね。

発注から出来上がるまでのスピードを最も優先したニュース用のテロップ専用機の開発は、NHK美術センターが請け負った。そしてモリサワと共同で、ニュース用写植機「MD-T型」が、東京オリンピックに合わせて開発された。

橋本:感光材を変えて、より早くできるようにしました。制作工程も変わって時間が短縮された。テロップサイズにカットしたシート紙を開発したり、専用暗室なしでのスピーディーなスーパー作りができるようにしました。オペレーターも増員して訓練して、報道局整理部に写植機を置いて、ニュースのテロップを作っていました。毎日、400枚くらい作っていたと思いますね。

このときから、NHKのテロップの制作は、「ニュース系」、ニュース以外の「一般番組系」という2系統が並行して進んでいくことになる。

5. 「紙」から「メディア」へ

手書きと併用しながらも、それから20年以上にわたって写植機で文字を制作する時代は続く。しかし、写植機の時代は突然終わる。そこには、「デジタル化」が大きくかかわっている。



小野耕平さん

1958年、東京生まれ。NHK美術センター（現・NHKアート）入社時より、テロップ制作等に従事している。現在、経営企画室計画総務部長。

1988年4月、『NHKニュース・トゥデー』のタイトルが初めてコンピューターで作成された。タイトル以外のスーパーはまだ写植機だったが、折れ線グラフや円グラフなどはすでにコンピューターで作成していた。同年9月のソウルオリンピック開幕日に合わせて、NHK放送センター内に新設された「ニュースセンター」からの放送がスタートした。取材から制作、送らまでを一貫体制で行う、本格的なコンピューターシステムが導入されたのである。ニュース報道のTVグラフィックス拠点「アートセンター」も誕生した（ニュース報道、緊急報道は89年2月から）。NHKアート（90年にNHK美術センターから社名変更）で、入社以来タイトル制作業務にかかわる小野耕平さんは、それまで写植機にしかできなかったことを、コンピューターが簡単に乗り越えていく様をつぶさに見てきた。

小野:写植機では白黒の文字しか制作できなかった。カメラはカラーですから、強調したいところを黄色いマジックで塗ったりしていました。でも、カラーのテロップは存在したんですよ。フィルムでネガを作り、照明用のゼラチン

を文字に乗せて下から光を当てて上から撮影する。たとえば天気予報の晴れマークだったら、赤のゼラチンに乗せて透過すると晴れマークになる、とかね。そういうのをね、最初にやったのが『海外ウィークリー』（80～85年）。世界の天気っていうのも、初めてカラースーパーで作ったりしましたね。

それが、『NHKニュース・トゥデー』の時代になると、色をふんだんに使えるようになってくるのです。そこから、コンピューターがどんどん良くなってきますから、“フルカラー”と呼ばれるところまで行く。

だからそういう意味でいうと、デジタル化があったからこそ、対応して、番組のニーズに応えられるようになった。そうじゃなかったらもう、本当に手でもってね、色を着けてかなきゃいけないみたいな世界（笑）。

「アートセンター」のシステムは、それまでの、紙ベース（アナログデータ）に代わり、すべて電子的に作成した静止画をディスクに蓄積し、各コントローラーに転送し、放送に利用するシステムであった。

ニュース系の現場だけでなく、一般番組系の現場でも同様のことが起こっていた。オリンピックの翌年、NHK美術センターに入社した秋山匡司さんは、アナログからデジタルへ変わっていきこうとする時期を、タイトル制作の現場で過ごしている。主に一般番組系の写植のオペレーションを担当していたが、デジタル化の波はここにも押し寄せた。そこで、84年、写研が開発したのが、「TELOMAIYER」（テロメイヤー）という機種である。ディスプレイ装置が付き、直接感熱記録紙に印字できるものだった。現像が不要だから、もはや、写植機

ではない。「電子文字発生機」という。

テロメイヤーは、最初は4書体しか打ち出せなかったが、毎年、新しい書体加わっていった。「デジタル制作」ではあったが、アナログ時代最後の機械であったと秋山さんは言う。



まさし
秋山匡司さん

1946年、東京生まれ。1965年、NHK美術センター（現・NHKアート）に入社、写植オペレーターを経て、デザイン本部グラフィックスセンター、スタジオ用品調達等の業務にかかわる。

秋山：テロメイヤーでは、たとえばタイトルを打って、プリントして、それをカメラで撮って、作画機のほうに引き込んで、その後ろに絵を付けたり、写真を合成したり、加工したりして、一つの静止画を作っていました。まだ動画のない時代です。でもシステム的にはデジタルなんです。

どういうことかと言うと、アナログからデジタルっていう時期はね、映像データでも文字データでも、一つの記憶媒体に入れば、素材そのものが全部アナログであっても、もう、それはデジタルになる。（編集時に）ディレクターにお渡しできるのが、紙じゃなくて、メディアになった。

テロメイヤーができたことで、写植機は必要なくなりました。ですから、アナログの最後、というふうに切り分けたほうが良いと思いますね。

文字を作るのにテロメイヤーを必要としたのは、一般番組系の編集システムそのものが、大きくデジタル化に踏み出したことにある。92年度から、NHK放送センターには、紙テロップに代わってMOディスク（光磁気ディスク）を使用した静止画記録・再生システムであるC-VIPS（シー・ビップス、Center-Video & Information Processing System）が導入された（93年度には、テロップと静止画の電子化への移行が全スタジオで完了）。

それまでの編集作業は、カートリッジに写植機で制作したテロップカードを入れて、映像に取りこむという方法で、あくまでも文字データは「紙」だった。その時代は、編集時に字の間違いに気付くと、ディレクターがすでに使い終わったカードから当該の字を探し、そこだけ切り抜いて貼り付けたりしていた。どうしても見つからないときは、NHKアートに発注し直さなければならなかった。

C-VIPS以降、文字はパソコン上で電子データとして読み込まれているので、MOディスクに「電子テロップ」として残っている。紙のときと原理は同じだが、ディスクからコピー&ペーストして、正しい文字を貼り付けることができた。その後、ハイビジョン用のHD-VIPS、両用の



テロメイヤー（使用年不明・写真は井関さん提供）

M（マルチ）-VIPSと機種は更新されていく。

テロップが電子化した状況を、橋本さんは、「ギザギザ」と面白い言い方で表現する。

橋本：写植の書体だって、元は全部デザイナーが手書きで作ったものですよ。基本はギザギザ。テレビ画面で、文字を一つ一つ見ると最初ギザギザだったじゃないですか。デジタル化して、放送には、技術的に（ギザギザを）埋めるようなソフトでギザギザが出ないようにしたんじゃないですか。だから、写植がなくなって切り替わったっていうのは、写植で求められたものがデジタルでできるようになったからじゃないですかね。

秋山さんも同様の考えだ。

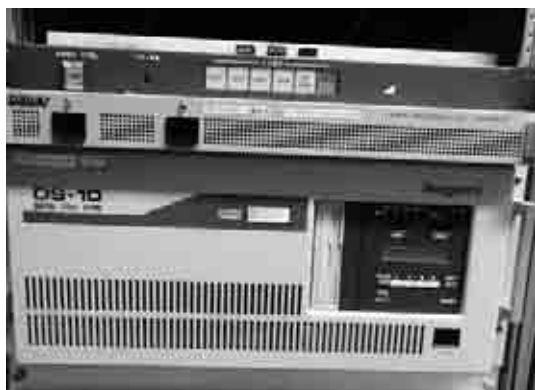
秋山：そうですね。文字発生機がテロメイヤーじゃなくても、つまり、写研さん特有の機械じゃなくても、市販の、例えば Mac（コンピューター）に入っているリョービといったフォントを使っても、文字の映像出力を取り込めるような技術になったんです。MOの中に入れば、それでいいわけだから。つまり、ただ単に普通の、特別な文字ではなくなったけど、それでもいいんじゃないの、という理解で、番組側もオーケーを出したんじゃないかな。文字のクオリティーが、写研さん（のフォント）じゃなければいけない時代ではなくなってきたんです。

写植機メーカーによるテレビの文字を作るためだけの文字発生装置は、テロメイヤーで完成を見たということか。だとすれば、写植は、デジタル化に至るまでの途上の産物であったにすぎないということなのだろうか。

橋本: 写植テロップを作ってたときのものを、C-VIPS に移し替えたんじゃないくて、C-VIPS は独自に開発したから、写植で培ってきたものは移行してないんですよ。もう写植って言わないし。植字じゃない、写真じゃないから(笑)。テレビの世界で言えば、写植の時代はもう、終わってしまった。

秋山: 一般番組系の電子テロップシステムでは、テロメイヤーしか当時は文字を発生できなかった。テロメイヤーの製造が写研さんですから、搭載してる書体は、写研さんの独特の書体です。そのときのデザイン性が、先端を行った。つまり、その時代をくみ取った書体を持った写研の機械を使ったということです。たとえば、一時期、評判だった、ナールD (DNAR) っていう書体がありますけれど、今はもうそれに代わる別の書体があるから必要じゃなくなった。

去年のものが、もう今年は駄目ですよ、っていうようなこと、あったんですよ。入れ込んだとしてもね。でも、その時々合ったデザインを、美術を、これからの人には、作ってほしい。テレビだから、平面に理解されるのはわかっている、だけど、テレビ美術という歴史があったんですから。機械に遊ばれる、って



C-VIPS (シー・ビップス)

いうのはなんですけど、機械の発展は当たり前ですよ。それをを超えるような形を考えるのが、人間だろうと思うんで。

『NHK年鑑』をひもとくと、「写植」の記述は、94年度以降は登場しない。写植の時代はあっけなく、突然に、終わりを告げた。しかし、関わっていた人たちはそれぞれが、懸命に最先端の機械を開発し、より時代が求める文字を追求していったのではないだろうか。

手書きデザイナーとしての竹内さんは自らの記憶で、手書きや写植機による文字制作が、コンピューターに移り変わっていく時期を語ってくれた。

竹内: 日航機墜落事故 (85年8月12日)。あれからスコーンと、タイトルはCGになりましたね。あのとき、日航機の飛行ルート、尾翼が胴体から壊れて吹っ飛んでいく画像が、全部コンピューターでできていましたからね。もうコンピューターへ完璧に移ると思いました。パソコンで作った文字が出てきた。初めはガタガタガタツとした文字があったでしょう。これはだんだんビデオが伸びていったのと同じようになるやろ。だから字を書く仕事はなくなるで、と本能的に感じたんです。

それでも、竹内さんの言葉によると、手書きテロップはそれからさらに10年、長生きをしたことになる。

竹内: 神戸の震災 (阪神・淡路大震災 95年1月17日) 以降、もう手書きの速報はなくなりました。神戸の震災で、災害の状況を書くのに、3日3晩徹夜したのが最後です。

6. そして現在・まとめ

コンピューターの機能は予想もつかないスピードで向上した。コンピューターに搭載される文字データも豊富なので、文字をわざわざ文字発生専用機で制作する必要はなくなった。さらに、一般番組系のC-VIPSは役割を終えて、2008年以降、NHK放送センター内（ニュースセンター以外）では「N-Telop 08」がそのあとを担っている。文字のデータは、MOディスクではなくUSBメモリーに保存し、送出力のパソコンに差し込めば再生できる。パソコンベースだから、ディレクター自らが文字をデザインすることもできる。見た目は普通のパソコンと変わらない。

さらに、テープでなくファイルベースで編集する「ノンリニア編集機」（91年から順次導入）では、テロップ作成もできる。クオリティーにこだわらなければ、事前に文字を作る必要もなくなった。「文字」を作成することは特別なことではなくなったのだ。

ニュース現場も進化を遂げている。89年以降オンライン化されたニュース取材・送出システムは、記者が書いた紙原稿がファックスで送られてきて、アートセンターでそれを再度入力し直し、テキストに変換したものを書体を変えてレイアウト、報道情報端末の静止画ファイルに登録していく、という流れだったが、現在は、記者が打った原稿がそのままテキスト化され、同じ機械でレイアウト、登録ができる（電子発注）。

テロップ作成用、写真を切り抜いてコラージュしたりするペイント系、CG制作用と、アートセンターには機材がずらりと並び、約160人のオペレーター（デザイナー）が、泊まり勤務、



N-Telop 08



報道情報端末でのアート業務（電子発注）

日勤帯とローテーションでこなしている。ここでもう、文字を発生させるだけの装置は存在しない。

* * *

手書きから始まったテレビにおける「文字」の歴史を、関係者の証言から見てきた。放送の世界に限ったことではないが、つくづく、テクノロジーの進化が否応なく新しい時代を引き寄せてきたことがわかる。ただ、情報をいち早く伝える使命を持った「放送」の世界であるがゆえに、その進化への対応も迅速で、たとえばある時期に時代の先端を走っていたとしても、

より時代に即したものが登場すれば、先駆者としての役割は終わる。今回のヒアリングで痛感したのが、「培ったノウハウさえも継承されない」という冷徹な事実であった。そしてその代表格が「テロップ制作における写植というシステム」であった。

しかし、担当者のお話にもあるように、その時期、時代の先端を颯爽と走ったことは間違いない。そして、その存在がなければ、前には進めなかった。契約数が伸び、黄金時代を迎えたテレビが、放送時間を倍増していくなかで、写植機の存在がなければ、時代を泳ぎ切っていくことはできなかつたはずだ。

何もかもがコンピューターに辿りつき、コンピューターが万能な時代は果てしなく続くように思われる。しかし、そんな人間の予測もまた、人間の英知は越えて行くのかもしれないとも思う。

NHKで、最後までコンピューターを使わずに筆文字を書き続けた渡辺裕英さんは、13年1月、84歳で亡くなった。テレビ60年の記念番組で渡辺さんの手書きの仕事が取り上げられることになり、張り切って取材に応じておられたさなかのことだったという。秋山匡司さんは、10年ほど前、送別会の席上で渡辺さんに「手書きはなくなりますか」と話しかけられ、「量は少なくなりますが、なくなることはないと思います」とお答えした、と渡辺さんの思い出を語ってくれた。

手書きデザイナーとして、いまも、時代劇のタイトルを書き続ける竹内さんは³⁾、13年のNHK大河ドラマ『八重の桜』のタイトルを見たとき、手書きは戻ってきていると感じた、と言う。番組タイトルだけでなく、出演者の名前も手書き文字だったからだ。

「『八重の桜』は、ものすごくわかってるなど。僕らにしたらありがたいと思う。手書きの温かみがあるんです。配役のところだけ活字ですね。あれはあっちにしたほうが見やすいですからね」

テレビにおける手書きタイトルの意味を、明快に語った言葉だと思う。番組タイトルは芸術作品ではない。テレビは見やすくなければならない。そして、温かくなければならない。

おそらく、彼ら以上の存在は、もうテレビの世界で現れることはないと断言してもいい毛筆のタイトルデザイナーたちが、異口同音に語ったことがあった。それは、「字を習ったことがない」、もしくは「習うのが嫌いだった」。なぜか。

代表して竹内志朗さんの言葉をその回答としたい。

竹内: お師匠さんについてなかったんが、今ではよかったんかなと。どんな字でも書けるようになった。僕の友だちで書道の師範やってますけどね、その一筋しか書けない(笑)。だからテレビには全然向いていませんのでね。テレビをやるには、そういうのはかえって邪魔になったと思います。

世界中のあらゆる文字文化と比べれば、たった60年の歴史しか持たないが、日本のテレビジョンは誇っていい文化を育てたのではないかと思う。

(ひろたに きょうこ)

注：

- 1) 廣谷鏡子 (2013) 「放送のオーラル・ヒストリー『生ドラマ』時代の放送現場」『放送研究と調査』1月号
- 2) フリップボード。文字や図を書いた板で、パターンとも呼ばれる。大きさは、Aサイズが180ミリ×265ミリ、Bサイズが263ミリ×365ミリ。テロップカードは100ミリ×125ミリ（「テレビジョン美術ハンドブック（部内用）」（NHK放送業務局美術部編集1963年）より）。
- 3) 最近では、NHKBS時代劇『妻は、くノ一』（2013年4月5日～5月24日放送）、『雲霧仁左衛門』（2013年10月4日～11月8日放送）、テレビ東京『新春ワイド時代劇 影武者 徳川家康』（2014年1月2日放送予定）のタイトルも、竹内志朗さんが担当している。

参考文献：

- ・日本放送協会編（1981）『NHK テレビ美術読本』日本放送出版協会
- ・日本放送協会編『NHK 年鑑』日本放送出版協会
- ・竹内志朗（2010）『テレビと芝居の手書き文字』イグザミナ
- ・東京放送社史編集室編（1965）『東京放送のあゆみ』東京放送
- ・株式会社 NHK アート編（2011）『NHK アート 50年のあゆみ』NHK アート